

# 右舷灯



30年ほど前、務めていた大学の船舶系学部の最大の悩みは受験生に不人気なことだった。昭和40年代前半までは、工学部の中でも入るのが最も難関クラスだった学科が、造船の荒波に揉まれて人気最低学科になり、思うように受験生も集まらなくなった。卒業生が新しい就職先として開拓したのが、同じ総合工学を学んだ学生を必要とする自動車産業、コンピュータ・電気産業だった。こうして出口の確保はできたが、入口については不人気が続いた。この過程で、学名から造船や船舶を外して、総合工学をアピールするために「システム」という言葉を入れた大学も多い。

そうした中でなんとか海事技術を広く知ってほしいと、夏休みには青少年サマーセミナーを企画した。主に小学生を対象に、船の浮力や抵抗などをやさしく教え、模型を自作して水槽で実験してもらった。評判は上々で、市主催の夏休み自由研究コンクールに入賞する参加者も続出した。こうした中で教育委員にも力を入れた。

## 海事教育の立て直し

最近になって海事行政や海事産業も、この危機的状況に気づき、小中学校の教科書への海運・造船関連の記述の復活が図られている。まずは一歩前進したといつてよい。しかし、将来的には初等教育だけでなく、生涯教育にまでわたる海事思想の普及が必要とされている。日本は、船に関する雑誌や本も欧米の国々に比べると少なく、海事博物館の数も少ない。幅広い層への海事広報の地道な継続が必要とされているように思う。

(池田良穂)